

## 人間社会存続のために

川崎 一朗

多くの方が認識しているように、今は科学が混迷を深めており、防災科学も同様だと思われます。混迷を解く手がかりとして、手短に歴史を振り返りたいと思います。

1950年代から1960年代は、「研究者は自分の専門分野の研究に最善を尽くしていればよい。その結果として科学は全体として発展し、人々も幸せになる」というパラダイムが強く信じられていた時代でした。我々も先生方からそのような教育を受けました。

1970年代から1980年代は、『教養主義の没落』（竹内洋、中公新書、2003）によれば、「教養知」「人間知」が「専門知」「技術知」に置き換わり、大学生協における本の売り上げが、教養書から技術書、はてはマンガにまで置き換わっていった時代でした。

防災の中心は地震予知であったと言えるでしょう。1960年代の末にプレート・テクトニクスが登場し、プレート間巨大地震の発生機構などが見事に説明されたため、「プレート・テクトニクスの枠組みの中で研究していれば予知は出来るだろう。時間の問題だ」という楽観的な気分が支配的であったのも無理はありません。そういう時代だったので。ただし、私の恩師であり、予知連の会長も務めた浅田敏は、つねづね、「自然は複雑だよ。そんなに簡単に予知ができるわけではない」と院生たちに語っていました。

プレート・テクトニクスは、「プレート・テクトニクス」という研究があったのではなく、古地磁気、地殻熱流量、地震の発生機構などの専門分野で「研究者が自分の専門分野の研究に最善を尽くして」得た成果を寄せ集めて、結果として新しい地球観が浮き上がって来たと言うものでした。そのため、プレート・テクトニクス自体は専門分野を超えた全体的な世界観であったにもかかわらず、必ずしも専門分野間の共同作業を促進しなかったという意外な側面が有りました（ちょっと極端な見方かも知れませんが）。それが、1995年兵庫県南部地震のあと、「あまりにも前兆探しに偏重している」と指弾されるまで、地震予知が防災の中で独歩を続けた土壌であったような気がします。

1990年代から2000年代は、阪神淡路大震災があったこともあり、地震予知が防災の前線から一歩退き、工学を中心とした防災研究が前面に出るようになりました。危険因子（hazard）の研究から脆弱性（vulnerability）の研究に重点を移したという言い方も出来るでしょう。そうすることによって、防災研究は全体として発展し、災害を減らすために大きな力になるものと期待されていました。しかし、現時には理想のようにはならなかったように思われます。主因の一つは、専門分野を越えた協同作業が進まなかったことでしょう。それもやむを得ない面があります。それぞれの専門分野が面白く、興奮に満ちており、なかなか他の分野に関心が行きません。この状況を抜け出すために、一層実践性を高める努力もされています。「人と防災未来センター」などはその例でしょう。

今は、「研究者は自分の専門分野の研究に最善を尽くしていればよい。その結果として科学は全体として発展し、人々も幸せになる」というパラダイムの有効性が希薄になった時代だと認識しています。各専門分野で必死に防災研究が行われているにもかかわらず、研究の進展速度よりも、社会の「脆弱化」の速度の方がはるかに早いように見えます。

2010年以降はどうなるのでしょうか。『教養主義の没落』で、竹内洋は、失われた「教養知」を取り戻すために、「全体性」「シナリオ性」「人間性」が大事ではないだろうかと言っています。

これから10年から20年、世界的な規模での「食」の枯渇は避けられそうもありません。長期的な「温暖化」の趨勢も不可避でしょう。日本では、「農」は崩壊同然で、異常な「少子化」の勢いは止まりそうもありません。そのため、産業は縮小し、経済は不振が続くでしょう。30年後、そのような状態になった日本を東南海・南海地震が日本を襲います。どう考えても、日本が、歴史上かつて経験しなかった脅威です。「研究者は自分の専門分野の研究に最善を尽くしていればよい」では、人々の幸せを守るためには不十分であることは自明のように思われます。

同様なことが多くの方々から語られています。 「食、温暖化、災害」を全体として考え、提案していく「全体性」が不可欠でしょう。そのような営みを行う場所は、つくばの研究所や多くの政府の審議会などではなく、大学しかないと思うのですが、旗印として文理融合などが大きく掲げられていても、現実には、「研究者は自分の専門分野の研究に最善を尽くしていればよい」という以前のパラダイムから抜け出しえないように見えます。

災害は「食」や文化も含めたあらゆることに影響を与えるので、「全体性」への視野を持ちやすい分野だと思います。防災研究所において、自分の専門分野の研究に最善を尽くし、優れた専門性に立脚しながら、全体に対してどの様な提案をするのかを考える営みこそが、「人間社会の存続」を支えることになるのだと信じています。防災研究所には、文理が融合しながら、科学が「人間性」を積極的に取り込む芽もあると思っています。現在の閉塞状況に突破口をもたらす可能性を秘めているのは防災研究所ではないのでしょうか。防災研究所の発展に大いに期待しています。